安齋雜報書　七

鎧色談
旗櫓鳶尾問答
槌鞠羅脊問答
馬上三物繪評論

内閣文庫
和書類
二五〇九一號
二八冊
一五三函
一六架

和書門
二五〇九一號
類
一一三函
二架
二八冊

内閣文庫
番號　和　25091
冊數　28（　7）
函號　153　279

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

帝國圖書館之印

鎧色抄

こゝに元亨義抄とあるハこれ乃中に淺
乃威毛乃事を記し四巻の後又古選色目を云
して古代乃威毛乃名称古義ふえ〻四を集め
たるさ是皆多賀宗常改乃ぬし乃説ふまり
てたるもの也ゝ乃ゝ又加乃ゝ古選色目乃中
より平義忠抄ふ云れ事し威毛乃名と云
らゝ出ゝくゝ乃ゝくゝとたるすへまゝ
如ゝ乃ゝくゝて又此書とあるハし此也
らくハひゝ乃ゝ事ゝとあるめへ事也ハ
○平義忠抄ふとたるゝ如く淺乃れ（サヲ）と云

形ふうへれをすべてのこふめをてれの形と
れの色と緞子の色やはこふとをとを合て威毛の
石を立る事ハを世の法をくいふへあを事く
古代の鎧ハ行威ゆをもれの形いをふれを
れのいろハをゆくと是をうたる巻式を威毛の
し緞子摸革のをの色のをとをくを石をなるな
りの事小花を石の威毛とをの定をくをすす
ゆう

鎧色詮目録

鎧之部

一 緋威の鎧の兜小梅鉢と以事
一 紺威鎧の事
一 緋威鎧の事
一 糸緋威鎧の事
一 紺坐法の鎧の事
一 五糸威鎧の事
一 赤威鎧の事
一 赤威肩白鎧の事

一 肩白赤革縅乃事
一 小桜革威縅の事
一 桜威乃事
一 萌黄糸威乃事
一 萌黄匂縅乃事
一 櫨匂縅乃事
一 匂乃事
一 匂乃糸乃事
一 夏威乃事
一 黒革威大荒目縅乃事
一 紫糸威縅乃事

一 浅黄糸威乃事
一 萱色と黄小返しする縅乃事
一 黄糸威乃縅乃事
一 黄威乃縅乃事
一 白糸縅乃事
一 白糸縅妻取る事
一 紺唐綾威乃事
一 柑子唐綾威縅乃事
一 薄黄唐綾と桃色紅威する縅の事
一 沢潟威乃縅乃事
一 薄黄小沢潟威ある縅の事

一紫威縅の事
一洗革人縅の事
一浅葉縅妻取の事
一卯花妻取の縅の事
一緋糸威縅の事
一白幅輪緋糸縅の事
一赤糸威縅の事
一萌黄小縅赤糸威縅の事
一桜色威の縅の事
一唐綿威の縅の事
一年坐縅の縅の事

一萌黄縅の縅の事
一練貫威の縅の事
一大荒目の縅の事
一人荒目一枚交の事
一二枚革人荒目縅の事
一黒革と二すよ切く一寸ハ巻て威の縅の事
一白き唐綾とゝく威の大荒目の縅の事
一白幅輪の縅の事
一糸毛の縅の事
一鐵の縅の事
一金の縅の事

一革入縅の事
一薫革威縅入の事
一縹色威の事
一朱札赤糸縅具足の事
一白々威入事
一紺下濃の縅入事
一金梅鉤入縅の事
一二ツ引両中一通り威縅入事
一萌黄一通り紫ゝく威縅の事

腹巻之部

一緋威胴巻入事
一小桜威の腹巻入事
一萌黄糸威の腹巻の事
一萌黄白の小胴巻の事
一黄威の胴巻の事
一紫革腹巻の事
一洗革胴巻の事
一紺糸ノ胴巻の事
一赤糸胴巻の事
一薫革威中二通り革小ふて威ある胴巻の事
一薫革腹巻の事

一 胸板白腰巻の事
一 黒革威板巻の事
一 赤革黄糸板巻の事
一 白綾威の腰巻の事

筒丸之部

一 糸縅威の筒丸の事
一 鞠塵の筒丸の事
一 萌黄威胴丸の事
一 筒丸腹當の事

以上

所出平義茂洗濯板巻目録

一 小桜と黄かへしなる濃の事
一 黒革威の大荒目小金まぜる濃の事
一 浅黄威の濃の事
一 赤皮威の事
一 かくかくや威の事
一 赤おどしの事
一 洗革の濃の事
一 かくかくの濃の事
一 馬皮威の濃の事
一 紫塗革の濃の事

一 伏縄目の撰の事

一 [illegible]撰の事

一 萌黄威の撰の事

一 白化の撰の事

一 ひおどしの撰の事 撰色淡き石間有

一 黒皮と二寸ハ切て二寸ハ巻て威行撰の事

一 竹の花威の撰の事

一 黒糸威小さ[illegible]かぶと[illegible]撰の事

一 黒糸威板巻ケ白金物打[illegible]ふしぬき板せ先

黒糸威の板巻二領[illegible]撰の事

一 萌黄威ハ板巻の事

一 黒糸威ハ板巻ハ事

一 逆沢瀉ハ板巻の事

一 [illegible]きたいハ板巻の事

一 ふし縄目ハ板巻ハ事 [illegible]

以上

一

俳諧の道の最初に掲ぐべき人は

俳諧八隆のるは年代不詳なれども如く俳の

草もとおもすとも奥くに年代不詳なるものへ書し　今流巻

九に大内紀保胤といふる博士人この文を浮し

給ふ河に匡衡の申ふ人ふのあけのうらて

元おくとくのうくさく　元明ぬこうまのあ

しとこれよのてあ小さのせさをこめるけ

ふのうとを中るとえ元ありあ年ののハ

とハ紅花にて深き華と云是元おとしハ

華おとし好る詩句俳の糸にておとし

ととを糸元おとしとふ文月ふこし

らへさるくいハ変用ハ仮りまうちきりめと
いとゆたくたくハ無花と緋威ちして神多
ちもも緋威のうち中ちきりめと立く
和の色りかへくおくすと芝と緋威の数多
おしらへうち浅うくちくちきり紙い立り
うし神も芝物もはしくちりひもはと
も右たこの如くかもちきりて二ちも一色
ちも外の色ふうちと暫へくおくすく後二年
会殿乃鎧なの和古画りもみへあを○武装
ちきりめとりハ意を殿治の頃より変用せん
つきとて姫用のまりをちきめとをかうき

乃上ふくく和也へさんつきとハさんとを花をみく
制をしまりてやをををけめしといつう
拵ふ上乃ちきめさん乃つきハ鉄と製ち上乃
車ちし威毛のちきめとハ大小遠車ち乃
じ用りし前経紙ハ浅いめち花ちそ
ちきめふまりたう有りいとおきし乃花
竟の鎧江四しのうをくくたうとええう
ちきうくとハ鎧ちるしちきりうりうち
ちりしゆ中ちとハ所を威毛の車をいへうう
鉄れのこしらへ乃ちゆハあうに光ヲ光く考
おへしちのうく変用せんつきうたうハ鉄乃

兩方ともに年始ならば袴の礼と
八月なるべし

一 紅威襲の事 鎧威の事
年代不詳 鎧威の中要に記す

一 鎧威襲の事
年代不詳 説を又所も記れし所異之

一 赤鎧威襲の事
年代不詳 鎧威の系に記す

一 紅生濃襲の事
上方八位より下 紅にてもそれと八位の紅は
なるべ為なるべ 年代不詳の系並流の系並流の例に准し

知るべし 古画にも見えたり○実流より上と紅うすく
もやもやと紫ふもるとも云八那なり

一 黒糸威襲の事
黒糸にてかるべ別より綴ぬし

一 赤威襲の事
年代不詳より記しなる赤革威の事

一 赤威肩白襲の事
無紋と糸威かくく 兩袖の冠の板の下二段と
白糸にてかるなり

一 肩白赤威襲の事
赤威肩白とりよりはしるるなり

一小櫻革威の事

藍革より白く小さ櫻の花形を染出したる革を
かさねたる上を黄染淡赤櫻黄返襠の糸にて如

一小櫻威襠の事

小櫻革威の事 革は字を畧しくなり

一櫻威の事

小櫻威の事 小の字を畧しくなり

一萌黄糸威の事

平黄染淡き糸にて萌黄威の事糸の字略なり

一萌黄匂襠の事

萌黄より薄き迄の下は白色を

薄くして白よりは白くなると云なり 匂の事は委く下に記す

一櫨匂襠の事

櫨色は黄色赤色の間なるを云 今世に成たるを
云なり 後成出る歟 櫨の皮搗米物なるを
ちゝみあかねにて染り 表裏共
色赤く黄と合せなるを
櫨はなるを云 田舎にて
なを云 其木も枝葉も
その木より仕り 秋の末
色黄になり 中頃は赤と黄と
はなれなりて 落葉なるを
よとなり色なれば 淡黄
なるを 古歌

小もとしもみちゆくらめり百そのの秋　竹徳流

一日みしらぬ十市の村の櫨もちらす又も紅葉秋風や

文政二年毎月一首　成瀬仁為象

芳馬氏ふるさとの菊のうきて見ふるに秋ふる櫨紅葉る

櫨句とりふ風もハ勢ハ神ちらハ上の方とうすく色ふるして後ちるよ

玉ちる紅色うすく黄ハ白くちるとうす句と云花黄色同例也

一句八車

漢八風もふ句とふハたらへハ薫物ハの句の

ちゝ初の後ハ香来たるふなりく　赤ち

ちるかと切りく少く香うすくなりて香来さ

えちるも又刀の焼刃ふも句とふるのり焼刃

八ちるよ虹のごとくへくわのくとうすく

ちるもの句とふ又婦人の眉と紫うす

ゆるふ上八方紅色濃くしたの方ハ薄く紫し

て雲鈴八色ふのごとく殊るその紫のうすく殊るふ

と句とふ風もハ句も太の意なり行きても神

ちるうすく八上の方ハ色ふくうすくの後ハ中色ふ

又ちの色ハうすくいろうして又次八後ハ白く

おうすく中極うすくなりて

うすくハ白くちるを行句とふ行色も句ハ殊へき

事ゆゑ花芸句櫨句の二色乃ハ古書よりの
名乗にはあらず

一句乃糸乃事

句乃糸ハ後の世糸乃ごとく長い毛の仕方といふと
ハ別のものゝごとく仮名遣へて毛の句
のものとなりて句乃糸のものと云今ら説も
あるべきを分けとなりて仕方の後ゝを必年
糸ハ豚毛の糸と用ゐ申し代豚毛を用たるを
句の糸といふものハ如ごとき人ハ後の毛もの
色をあらそ財を偏して性ふ今ハあらず拘り
て忘ることなしあり事代の後も性ふ合されど

共ゝ源者ゝ事を忘じ色句ひの糸を年より引く
を忘じを消をんごと豚毛の糸ハ色との糸を組
交たる糸ごとハ別ら組交たる糸と年年
ごとくとハその忘じ色を豚毛乃糸の色交
たるを全きいふを孔を孔ごとも豚毛の糸の
色をを忘じをのうすくあるを糸をて年糸の
豚毛を句ひの糸と名ハ仕るごとくいふも云ま
句ふ句ひの句を仕乃句の糸乃事をつよ
ひ指ます事ごと別て毛を小年糸と云今を
て名と云ものハ古き事ごと別の毛云も年糸ハ豚
毛と用ゐの定式なり又神と多宿の黄泉の

上ノ方ノ色濃ク必ズ本ノ

一 茂威ノ事

ウモ葉ノ糸シ威タルモ茂モ糸威トシテ
いむつうしきも黒ク藍威トいふべし古代ハ
行ものも簡易ノ事にむつうしきものし物の名ノも
酒ノモ器濃ク源京重代ノ濃深ノ名ノ
きぬとゑしハ濃ク茂ノ色咲ノたるノ事歟
おくせうし平治物語ノ文ヘ是ハかの京
ノ名物ノ事ノ中ノ事

一 黒革威大荒目濃ノ事

黒革ノ威ノ荒目濃ノ事ノ事

一 紫糸威濃ノ事

紫糸ノ威ノ濃ノ事ノ事

一 淡黄糸威ノ事

淡黄糸威ノ事ノ事

一 藍白地ノ黄ノ返シノ濃ノ事

藍白地ノ黄ノ返シノ濃ノ事

藍染ノ革ノ白ク紋ノ染ノ出シタルノ黄ノ染ノ革
ハ藍ノ下ハ黄ノ濃ノ白紋ハ黄ノ濃ノ色革ノ
ておくしたるノ藍白地ノ黄ノ濃ノ色革ノ濃ノ
平家物語ノ文ヘ事ノ小袖ノ黄ノ返シノ濃ノ
も見ヘ小袖ノ濃ノ紋ハ白ノ濃ノ藍革ノ白
紋ノ革ノ黄ノ濃ノ革ノ色おくしたる

とゝなり

一 黄糸威乃渡乃事

黄色の糸にて威したる物乃細乃

一 黄威乃渡乃事

黄糸威乃中巻乃事乃

一 白糸渡乃事

白糸にしたる物乃細乃

一 白糸乃渡妻元ある事

惣都と白色にて威しく紬乃両耳と別の

文乃糸にてつまをたるとゝ妻ハ端のまゝ

元の軒のつ面のさ乃つまをゝゝ端のまゝ付まゝ

付まゝ付面ゝ付面ゝ歩く物の歩ハ端ゝゝ

とハいゝゝとゝ端をいゝゝとゝ歩くつまゝゝとゝ

端の方と一ま井も糸の色の糸とハく色とく

付ゝとゝ〇妻元ゝ付まゝゝと耳糸の色

ゝる事とゝゝハ非ゝゝ

一 併唐綾威の事

併色の唐綾とハて威たる唐綾とハ唐

ゝ面ゝある綾とゝゝ

一 杉糸ノ唐綾威渡の事

杉糸色の唐綾とて威たる杉糸色黄

色にて少赤色ゝある色今世にかゝ茶と云ハ

如し胡曾抄ハ赤抄紫抄黄抄紫ハ黄色
色ニ赤色ニ赤色ニ黄色のハ白色なるもの
一 花黄房後と書て黄房ハ黄房ハ黄房ハ黄房の事
萌黄色の房後と書て黄房と書て黄房と
十の二度とし如ハ黄房と書て黄房と
一 沢潟の沢潟の
沢潟の沢潟の中年表沢潟の道沢潟股考の事
委く記す故略す
一 花黄ハ沢潟ハ沢潟ハ沢潟の事
惣都と花黄ハ黄ハ黄ハ黄ハ黄ハ黄ハ
てきもハ沢潟と黄ハ沢潟の中たり

一 紫黄沢潟の
紫色ハ黄ハ黄ハ紫ハ黄ハ黄ハ黄ハ
一 洗草大沢潟の事
洗草の中ハ年表沢潟ハ沢潟ハ大沢潟ハ黄ハ
ハ中ハ人ハ沢潟ハ人ハ沢潟ハ人ハ沢潟ハ
一 洗草沢妻ハ沢潟の
洗草沢潟ハ沢潟ハ妻ハ沢潟ハ
一 外花ハ妻ハ沢潟ハ沢潟ハ
再花潟ハ中年表沢潟ハ沢潟ハ妻ハ沢潟ハ
一 紺糸潟沢潟ハ中
紺色の糸ハ潟ハ潟ハ潟ハ潟ハ潟ハ

一　白幅輪紺糸威鎧乃事
紺糸威乃鎧乃むね板よりかこおしつけの板袖
乃よせ乃板呂の緒ゟのひはり迄しと云也
まてをもえんともたゝし白とハ白く服
のことと云也
一　赤糸威鎧乃事
行よ深の糸にておとしたるを云也　茜染の革
にておとしたるとハ赤威と云又赤革威といふ
赤といふて緋といふの義将軍家常法にあらしぬ
一　萌黄糸海さたる赤糸威鎧乃事
萌黄乃中に云如し浅黄なるとハ荷の字也

錦ゟゆと蒔といふハ古代の詞也古来ふれた詞也荷統
といふもかうするゆゑ赤革威なといふか如し
一　櫨匂威乃事
かしらおとし洋ゟしそかしら乃羽色と似たる
おしそめくの名なりかしら鳥ハ江戸ニてハけらと
云なしかし鳥ハ古歌にもよめり
永久四年百首
夏麻　詠　権　のイ　俊頼朝臣
かつそめくるうゝ山のふる葉にかしら鳥さへゆふあけて
大和本草ニ云かしら鳥頭の毛斑多シ背ハうす赤く
紫色也翅黒シ翅ニ白斑あり色の毛あり肉脛しく

不可食又廣大和本草ニ云鶏鳩和名カシトリ爾雅
釈名ニ曰鵝鶏郭璞カ注ニ鵝鶏即鵝鴉音匹及楊
子方言ニ江東謂之烏臼張華亦云鶏鴉大如夜
燕毛羽楊青有黒斑背淡紅紫色相交肉味腥
不美云々

撰多威ハ蘇芳縹色の糸ヲ
以て威しなるとなり（撰色ハ今云ふる色）
色ハかしなるハ胴の色ハ小紅縹色の糸の色
引て黒漆の孔の交てなるハかし鳥の毛色
の羽ハ黒黒ハ縹ハ紅なれハ縹糸威とかし
多威と名付てよハめてやハ又云かしなるとハ
字列鳥。列鳥。鷂。鷂。鷂。鷂。鷂。鷂。鷂柴ハ字ヲ

用ル八紫ハ字ヲ用ル八紫ハ字ヲ通ルなるハ
撰多と書へし（撰多威ハ法皮ハ色ハ）
縹色威古画ニ入ル

一

唐綿威ハ本
庵より渡る綿と歳ヲ細く裂て威しなる
唐後威なるの製なるハ紅なるハ

一

耳坐法隆の事
耳の字みとハ耳ハ大神耳神
と書ておのれとなるとハ日月なる
耳とハ神武帝の耳なり神武帝の左中坐し
給ふ又ハ左右と中色ごとて又ハ左右の指と

濃色ふかきもあり淡色なるもあり同じ山吹色なれども
我紙にもうすきもあれとうすくもあるハ
たゝそこなう物くさしたるものなれとそこ
ハ名とはなるなり

一 黄こ返なる濃八重

黄こ返なるハあわ色と黄より返したる色なり小柳と
黄ふかくしたる平家紫なるより用ひ萱草色紋の
草と黄ふかくしたる草とおなしたるとなり

一 紅色藍八重

紅色と藍とを細くまぜて藍しるくあやとな
しの割袴に用ひる物なり紅色とハ今世にてら
ハしめとゝ云物くさらのしめとゝハ藍色なるをくさらの
ゆゑ物なり藍のきのしめのきこゝなり
めりそ 紅ハ生糸にて緯ハ紅色糸にて濃ハ反練緯
とゝ云くさらハ物しめきのくさらと賀年なる成
はしめとゝ云紅緯とハかりとゝ云室町殿の代ハくさらハ男女ともに若このしめハ
児前髪童女なとの外ハ若せまるもうす色ハ
成色小物にもうれとも庶人ハ用ひ

一 大荒目濃の事

平氏家法の兵革威の大なるこゝもまきなる
濃の糸小なるものを安くなるを修しこゝ所を
一 大荒目一枚交八重

子金と一枚なるもの

一 二枚革大荒目渡八本

革と二枚なるなり大荒目なる渡の

一 黒革と三寸小切く一寸八分にて厚き渡の黒革の大荒目なる

八上四ヶ條ハ平武義渡の事なり委く記人度世有る異し

冬考をへし

一 白き唐渡と云く厚なる大荒目の渡なり

白き唐渡と載て者て厚き大荒目の渡なり

保元物語ニ八龍と云ふ白さ

ゆやとそておくしたる大荒目のようひ

ほうの八金ようとまるまこくあり是ハ

朝の名せしし渡の事と云ふ八保元

代の八龍の渡ハ此製なる物と初めたり

一 白梅渡の事

白く梅ん八本有ハ記ス故此事也

一 赤毛ノ渡八

赤威の渡也毛とハ威と云ふ革威綾

威沸威組毛威とあるべき物に対して赤

毛の渡と云ふ

一 鐵鎖（クサリ）八本

扶ケ礼と作リたる濃也續日本記曰光仁天皇
宝亀十一年八月庚戌勅諸国中畧但鐵甲不可徒
欄毎經三年依舊修之　延喜兵庫寮式挂甲
一領中畧打札四十日麁磨四十日穿孔四十日下畧
源平盛衰記頼朝誅罰ノ御所祈ニ願ニ鐵鎧ヲ太神宮
ヘ奉ラル　又保元物語源家重代ノ八領ノ鎧ノ
中ニウスカ子ノ鎧アリ　徒爛ハリウニスルナ
金覆の車

一

えいこうれの濃よりあるを金モ鐵モ覆とも
ゆへ扶濃の車と沼兼好年九月十八日頼朝滝冠
の祈ありよ平家ヲ伊勢大神宮へ濃と
ゆ給せられし車あるを濃の車と云濃石練
抄ニよハ金濃と記シ源平盛衰記ニハ扶濃
と行ふ是と西と也へし藏の字も金の字も覆と
も故金濃と共に作へし

一

革ノ濃ノ車
いにしへ革を礼と作りあるを續日本記光仁天皇宝龜
十一年八月庚戌勅諸國申三年一度立例修理今革甲
衷身軽健中筋難貫自今以後年料ノ甲冑皆
宜用革依前例毎年進様（営繕令義解曰様者形制法式也ト云ヘリ）
三代實録貞観十二年條曰小野朝臣春風奏言故人
小野朝臣石雄家革甲一領牛革甲一領在陸奥國

下畧延喜式造革短甲曹一領源家重代八領の鎧
の中いざ鬼と云後ありし係えあ内よ世ゐざ鬼とかハ
牛子氏の毛ぐの皮をとるもおぐしゆりとるへゆう

一 妻取ハ腰ノ事
取妻ハ腰ノ事ハ左二品ハ一ツ
ハ小ハ腰ハ腰ハ腰のゆき
の糸とかの色の糸ハ腰のいろと変へたるハ
も云ふとハいろとも云ハ

一 薫革威後の事
ふもべ革と威くおぐしたるハ細ハ

一 縹色威ノ事
縹色ハ今世ハ物ハ色の糸と
ハ威なるハ威一名縹威ハ威ハ

一 朱札赤糸ノ異足の事
朱札朱ハ赤札ハ古代の後ハ異足ハ定式と
す朱札ハ定式ハ定式ハ布有の足ハ
くハ人の好ハ無ハ事もハ
札糸とハ今ハ利の布と作ハ朱
札赤糸の異足ハ菊藻の糸ハ異足と
ハ後ハ異足ハ

武源記に婦人のけさひの具のものとけさひの具とを云へり佛前の二ツ具足と云て知へし中世八軍の具の者なる故武家にて具足とゝなへ侍もうき淺の事と世ふ也りく八古製の淺といふ也今製の淺と八色足と云淺あり〇淺掛ぬき事〇淺も具足ともゝ云也

一 色〻威〻事

胴も袖も一色〻小〻小色と名へ〻威なるを云なるへし〇此威も古画に見る

一 或説に無淺師の頭に丸の音威にて丸を間なの糸と云へ〻威なるへし〇此物也れの音威と云事なるまの古画杯の書て取えなし

一 袖下濃の淺の事

上と〻ち下淺黄なる也淺と法くして下と袖を不威〻にて〇平家芸術に記しなる禁色法の例に准し知へし〇すそこと云八ものすそ紅下法より外八ものさ事〻と云説あり是非〻袖下法あるとなる事と知へし

一 金幅箱入淺八事

全てふくさんとなるを云ふなるを記したる
白幅輪鉾糸選八角と参考して知べし大選
のものも前に記したる洗革の大選と云こはし
一　二ツ西中一通り威選八本
はしらしらかはらも
一　前茨一通り紫にて威たる選八本
典旅と前茨糸にて威し他多留の中と一致
一　大字小紫糸にて文とくて威しなるなり

一　鉾威八股巻こ本
鉾威八中午後巻際小記ス如選の鉾威小はし
一　小猩威の後巻こ本
小さらおこ午後巻選ス記ス選の威毛ほし
一　前茨威の腰巻こ本
午後巻選ス前茨選の威毛こはし
一　前茨白の小後巻の本
前ス記ス本の選の威毛ほしふくら巻と云八意
の前ス小さらこ記ス云
一　茨威のこら巻の本
茨威も前ス云選小はし

一 紫革被巻の中
紫革と誠てかとしたるもの
一 洗革被巻の中
洗革の中年経洗よりひの感元は
一 紺糸被巻の中
うん糸にて感したるもの洗に記漏ふは
一 赤糸被巻の中
赤糸被巻の中
一 黄糸感中二通黒革にて感る被巻の中
黄革感中二通黒革にて感る被巻の中
想那とふもへ革にてかとしたる胴の中神まを
の中ふもく被節と二通かとしたるもへ

一 黄革被巻の中
黄革被巻の中
一 白被白き被巻の中
白被白く感したる被巻もへ想
ひの被白く白く感したる被巻の中
那もかもとも被巻の中
一 黒革感被巻の中
黒革感被巻の中
黒革にてかとしたるもへ別の中
一 赤革黄糸被巻の中
赤革黄糸被巻の中
一 底は赤革一底は黄糸底ふかとしたるもの
底へし 古画に革と糸とのもの底は初もまれも
此所の感元入へもの

一 白後威の板巻の事

白後と書てあるゝ別のゝ細ゝ

一 糸縅威の笹丸の事

糸縅おゝ八幡中宮武器法帖ニ笹丸の
筒の字胴の字とも用ひ筒の字と用ひ笹丸八今世
迄古来より多く筒の字と右て引合まゝ陸奥の
板法をかなふ胴ハ鎧の板もなくあ
ひ引の上ニ書ハ成ハ有ハ有ハ
ゝ有ハ有ハ後ハ有ハ胴ノ形後ハ

後ハ右の方と開てあり胴ハ形ハ
ハ右の方と開ゝ右の方ニ引合胴と
丸くゝこむ丸笹のこゝ丸笹のふと用る
もゝの中へ入ハ有ハ又笹の字用ル胴
と丸くゝこむ入ハ胴の字のもあり

一 麹塵の笹丸の事

麹塵の後と試ら細く書てあるゝ
ゝ入ハ入ハ麹塵と書てあり。
ゝ入ハ入ハ黄色ニ成ハ試ら
ゝ後ハ地の文も故の文とゝ有ハ麹の

花八文八如シ其ハ麹塵ト云名付ケ又一名ハ山藍
又ハ山くるの羽の如ク仙人威ケ
天子の御裝束ハ麹塵の御祀ハ一名を色も
又山藍色ともいふ御紋桐竹鳳凰と織り
御袍ハ桐竹鳳凰の紋と織る事

一

蔵人威桐丸の事
桐丸板面の事
明徳記ニ大内介ハ其ハ神祇官の表と背よりて
く射手の兵ハ皆回丸の服装帽子ぶとして
瑜ヶ嶽へ流さく兩の袖ハ如く射手

ハ右の回丸と服装の兩の袖
衍文なるへし　回丸と板面ハ同丸の
板面したるなと回丸服面と同丸服面ハ
とゝめ革ニて作れ丸もなく横ニ長く
連ねるとそれハ小鍛て肩上ハまんまく
丸如くなる革と付く肩ニ胴ハ編ム
て作ル革ハ丸も好く前ハ少斗短くして
法と同ハ半ハ小革ハ前の如くして下を切ル
物と付たり神もなく革ハ長へ物なし
も寸ハ板ニ面ハ地ハ黒く板面と云ハ
毛氈の下ハ黒く又方と作くお立人と

上ハ既ニ八法師元と云ふ人ハ人ニ云ふ又ハ板面
ものなり

右威元の名目の出所ハ古漢色目より記し
ものハ世中ハ略して死子千を世古書
上面にて云へる威元の名目世より多し
古き威元の名目と云へるも妄説多し故
よへうう

附録

一 後堀川中より春画の巻物と酒元器く出陣の
時山画と云て是と今くおしむ日の軍必勝
利あること云傳ふ秘事故実あるものと
云人あり按ずるに是妄説なり夫合戦ハ
勝敗ハ時の運命ハ知りがたきものなり大小ハ
人力の賢愚より小ハ士卒の勇怯より
出る事なり人将たる士卒怯るハ何の画とか

そもそも絵画あるべき事
なるべきかの画と云ふ事
何れの人画と云ふと見さるふるものん
やの人画と選ばず納めて書く事はなき人の
有為の丈と人は知らんものと物を書く事と指南
ここつけ秘事故実なるべき初て
かさもなるものの春画と云ふ如きの小なる
大事に係る事はもれいの画と論じ

人將笑ふして士卒皆
なるべかの画と云ふ事なれば勝敗

も納じ事も人々の好に任せ
秘事故実あるべきの人なき
事の何れの古書にもその秘事故実なる
所なし或は何れの將も傳来の秘事
或は何れの勇士も傳来の故実なる
べし設世よいかるもあるべしたとけ事
妄説信用するべからず

明和八年辛卯秋七月十四日

尾徒隊士　伊勢平藏貞丈著　卯

梓檀鳩尾問答

一或問ニ従ノ相引ト唐人ノ長ハ鳩尾板ト用ヒ左ハ梓檀板ト用ヒ両方ヲ分ツ事ハ如何

答云　世事ニ古書ニ物ノ尾ト注シ来ル物ハ鳩ノ尾ハ必ス小鳥ニ高低ヲ付テ尾ノ方ヲ敵ニ向ケ兵仗ト称シテ右ノ方ヘ指シテ働クモノニシテ尾ノ長ハ左ノ尾ノ長ハ板ト共ニ屈伸ヲ能クス事ノ如ク弓矢ノ張ヲ引ヲ妨